

家庭祭壇に置かれる「モノ」の物質性^{マテリアリティ}

——日本の正教徒宅にある家庭祭壇の比較を通して——

佐崎 愛

キーワード 日本ハリストス正教会、家庭祭壇、木製十字架、モノ、物質性

1. はじめに

本稿の目的は、日本ハリストス正教会（以下、日本正教会）の仙台地区（都市部）と中新田地区（地方）における家庭祭壇を主な事例として、日本人正教徒の家庭における家庭祭壇のあり方から、信仰の場に置かれるモノのあり方を考察することにある。

モノを考えるにあたって正教会はもともとイコンを、イエス・ハリストス¹を見るための「窓」として重要視しているが²、日本に正教会が受容され土着化していく中で、このイコンが置かれる家庭の祭壇はより個々の家庭の状況に合わせて「日本化」し、イコンのほかにも様々なモノが置かれるようになっていった。本稿ではこのような家庭における信仰の場がどのように構成されているのかを、特に家庭祭壇に置かれるモノから考察し、また家庭祭壇³を都市部と地方で大きく分けて比較・検討することで、日本人信徒の家庭における信仰の場が持つ特徴について考察する。そして最後に、家庭の信仰の場にあるモノの持つ機能について考察することで、家庭での祈りの際に用いられるモノの役割について明らかにしたい。

1 イエス・キリストのこと。日本ハリストス正教会においては、イエス・キリストをギリシア語音かつカタカナで表記するため、ここではそれに倣って表記することとする。

2 中谷功治2017: 99「第三章 イコンの教会—ギリシア正教徒イコノクラスム—」指昭博、塚本栄美子編『キリスト教会の社会史 時代と地域による変奏』彩流社、東京、99頁より。またパーヴェル・フロレンスキは「イコンとは別の世界への窓口」であるとした[アルフェエフ（高松訳）2004: 92]。

3 これは正教会における一家庭の家の祭壇を示している。なお「家庭祭壇」という呼び名は京都ハリストス正教会のパンフレット「聖パンを記憶しましょう」にあったものを基準として用いているため、本稿はこれに準じる。その他に、祭台と呼ばれることもある。

ここで、まず本稿においてポイントとなる「モノ」という言葉について、その定義を明らかにする必要がある。宗教的場面で用いられる「モノ」の研究として、宗教学者の岸本英夫は「宗教文化財」という語を採用し検討を行っている。岸本によると、宗教文化財とは「個人を離れて宗教的価値を担うもの」であり、「宗教的価値を象徴する特殊な文化現象となることができる…（略）…蓄価性の宗教的価値体⁴」と定義している。したがって、ここで岸本の言うモノは、「社会の場で、個人を離れても存在することができるような、有形の文化的な素材」としてのモノを指している〔岸本 1983: 116〕。本稿の事例で扱うモノは、当然この意味合いを前提としている。しかし、本稿ではモノそのものが持つ機能や役割、また人とモノとの関係性を検討することを目的とするため、少なくとも本稿においてこの定義は十分ではない。また、民俗学の分野から「信仰民具」にも触れておきたい。信仰民具とは「神具・祭器などの信仰生活に関わりを有する」モノであり、徳丸亜木の議論の中では①祭具・神具の特徴を持ち（場合によってそれは大量生産され流通しており）、②物理的機能の下だけでなく象徴的機能を付帯された、③聖性を保持する（もしくはした）モノを指し、具体的なモノとしてお札、注連縄、神像、壊れた祭具などが挙げられている〔徳丸 1992: 69-98〕。しかし、徳丸は信仰民具をそれが廃棄される際の聖性の付帯状況についての議論の中で用いているため、やはり本稿において論じるモノとは焦点をやや異にしており、本稿においてこの名称はいまいちそぐわない。したがって、これらの意味合いを吟味した上で、今日、特に1980年代以降、文化人類学や考古学において盛んに議論がなされているエージェンシー論⁵の中で語られるモノ、さらには物質性 materiality の視点から当事例を検討する必要があるだろう。

まず、近年文化人類学において、エージェンシー論は非常に盛んに議論され

-
- 4 蓄価性の宗教的価値体：宗教的価値が、個人を離れて、現象形態の中に蓄えられる（「個人の中に、宗教的価値をよびおこす」とも言い換えられている）…（略）…宗教的価値体の蓄電池」を指すとしている。〔岸本 1983: 104-105〕
 - 5 エージェンシー論：「『もの』たちがそれ自体のうちに孕む能動性、主体性、のっぴきならない力やポテンシャルに注目し、そこにこそ、『もの』とひとの関わり合いを正当に評価する方途をみいだそうとする態度」をもって語られる議論。〔床呂・河合 2011: 4〕

できた。そのうち、先行研究としてエージェンシー論を語る上で特に触れておかなければならないのは、この論の先駆者的存在である、Gell と Latour である。Gell は、アート・オブジェクトを対象とし、それが畏怖や魅惑などの感情表現を引き起こすとして、モノの持つエージェンシー（行為の主体性・能動性）について言及した [Gell 1998]。また Latour は、エージェンシーを人間だけの特権ではなくモノと人からなる関係と見なし、それをアクターネットワーク (ANT) という視点から描き出した [Latour 2019 (2005)]。なお、ここで言う「エージェンシー」とは、社会的なエージェントとも言い換えることができ、製作者である人の行為を拡張し、媒介するような視点を指す。これ以後、文化人類学の分野では上記の論を基にして、モノの範疇を身体性にまで広げることで盛んな議論がなされてきたが、近年はこのモノの持つ性質をさらに細分化して検討する傾向が見られる。例えば、床呂郁哉・河合香吏らは編著『ものの人類学』でモノ論の概観を述べた後、モノを①生成、消滅、持続という物流、②生態(自然)の中のもの、③身体性とのもの、④「もの」の持つエージェンシー、⑤新たな取り組みとして他領域との連携、という大きく五つの視点に切り分け、具体的な事例を交えつつ考察している。また、古谷嘉章は、編著『「物質性」の人類学 ―世界は物質性の流れの中にある―』中のプロローグで、19-20世紀から学問上扱われてきた文化を語るためのツールとしての object としてのモノでなく（もちろん完全に意味が切り分けられないことにも言及した上で）、「私たちの住む『この世界』が物質から成り立っていること、私たち人間も物質としてこの世界に生きていることを、骨身にしみて実感」させる機能を持つ「物質性 materiality」について、今後研究する必要があると論じている [古谷 2017: 4]。ここで述べられている「物質性」とは、モノを考える俎上に時間と（世界の）動きの視点を加えることで、モノを「物性 physicality」、「感覚性 sensuousity」、「存在論 ontology」⁶という三つの側面を持ち合わせるものとして

6 これらを著作で用いられている問いの形に直すなら、それぞれ、「世界は人間にとってどのような条件なのか」「人間は世界をどのように体験し、どのように働きかけるのか」「人間はどのような世界に住んでいるのか」となる [古谷 2017: 16, 19, 22]。

提えられる。特に古谷は、従来のエージェンシー論からモノを語ると、「科学的自然が普遍的であることを無条件に前提してしまう」として〔古谷 2017: 12〕、より存在論的な物質的部分を抽出し、それに時空間の要素を重ね合わせて「物質性 materiality」として研究を進めることを提唱している〔古谷 2017: 3-32〕。本稿は、床呂・河合らのいう「モノ」、そして古谷のいう「物質性」を援用し、日本の正教会の家庭祭壇について考察していきたい。

先行研究で岸本が指摘するように、宗教学において宗教的場面におけるモノの持つ力、そして及ぼす効果の大きさは、宗教宗派を問わず重要だと考えられている。仏像やキリスト像、聖画像、ご神体など直接祈りの対象となるモノの存在はもちろん、儀礼⁷に伴って用いられるろうそくや香炉、線香なども象徴的な意味合いを持ち、その場を構成している。本事例においても、アイコンやろうそく、木製十字架などをはじめとした多くのモノを見ると、その宗教的価値は無視できない。しかし、もちろんこの宗教的価値も非常に重要であるが、そのような宗教的意味合いを含んだ上で、本事例ではモノを通して自分と他者、特に同じ宗教宗派でない他者とが結びついているという状況が存在していた。この状況を説明するため、本稿では、このモノが自分と他者をつなぐというその役割に焦点を当て、モノそのものが放つエージェンシー（主体性）を踏まえた上で、モノそれ自体が持つ物質性の観点から、家庭における祈りの場である家庭祭壇に置かれるモノについて検討したい。さらに、地域の特徴に着目し、都市部と地方における家庭祭壇のあり方を比較することで、モノの持つ特徴と機能を地域性の観点からより立体的に描き出せるよう試みる。

ここで、表記についても触れておく。本稿ではエージェンシー論を踏まえた上で⁸、より物質性の意味合いを包括したものの分析・考察を行うことを目的と

7 本稿において、『宗教学事典』の「儀礼」の項目に則り、慣習性があり形式性のある宗教的な祈りは、儀礼 ritual に統一し礼拝 worship の語は混乱を避けるため用いないこととする〔田中 2010: 26〕。

8 『ものの人類学』ではひらがなの「もの」で表記されており、これは「教義の可視的で有形の実体（個体）ないし物質や物体というニュアンスを超えて、大和言葉の文脈〔補：「ものけ」などに見られる不可視なものまで含む「もの」〕における『もの』の広いコンテクションや多義性を敢えて含みこんだ用語として定義」している。〔床呂・河合 2011: 16〕

するため、古谷らが用いている「モノ」⁹という表記を借用することで、モノの持つ宗教性と物質性を考察することを目指す。

さて次に、簡単にハリストス正教会の概略を確認する必要がある。正教会 Orthodox Church は、ギリシア語のオルソ（正しい）とドクサ（教え）という語に由来している。全国に教会は55か所、布教所は11か所存在しており、うち東京大主教教区に20か所、東日本主教教区に30か所、そして西日本主教教区には15か所存在している（2019年10月時点）。日本正教会は、江戸末期の1861年にロシアから宣教師ニコライ¹⁰が来日したことに歴史の端を発する。日本に正教会がもたらされた後、日露戦争など政治情勢によって信徒数が減少するも、今日まで連綿と信仰が続いている。なお、『宗教年鑑』（平成30年版）によると現在の信徒総数は9,516人である〔文化庁 2019〕。また日本正教会では、最初の宣教師ニコライの意思を引き継ぐような形で多くの日本文化が取り入れられ、神による記憶を表す「死者の記憶」¹¹概念と日本の供養文化の間で交渉がなされることで、新たな日本独自の様々な実践が生み出されてきた。特に家庭における信仰について、正教会はロシアでも推奨されている家庭祭壇（教会によっては祭台）を日本でも取り入れ、教会のみでなく信徒各人の家庭においても死者への手厚い祈りを行えるようにすることで、土着化を果たしてきた。このような日本での土着化を果たす中で、この家庭祭壇はより状況やニーズ、そして地域性に合わせた形で今なお実践がなされている。本稿ではこの地域性と信者のニーズに着目し、都市部と地域に分けて¹²、祭壇のあり方を検討したい。

9 以下、モノに「」は付けず用いることとし、モノという表記の場合は上記の定義において用いるものとする。

10 聖ニコライ(Николай, 1836-1912)、修道誓願前の名前はイヴァン・ドミートリエヴィッチ・カサートキン(Иван Дмитриевич Касаткин)。1861年、日本にロシアからハリストス正教会をもたらした。1861年に箱館の領事館付司祭として来日し、その後キリスト教が日本において認可されると、熱心な伝教活動を行い、日本における正教会の土着化を図った。なお、1970年に列聖している。

11 「記憶(память)」:「神に憶えていただくこと(記憶)は光栄と生命を意味し、神に忘れられることは墮落と死を意味する」〔ホプコ(小野約訳)2016:110〕。中でも、すでに亡くなった者を神に記憶してもらうよう祈ることを「死者の記憶」としている。

12 ここでいう「都市部」と「地域」の分け方について、厳密に分けることは困難ではあるが、いくつかの要素において分類した。例えば、都市部は主に司祭が在中しており、東日本主教

外来宗教としてのキリスト教の日本への受容の問題についての先行研究は、非常に分厚いものがある〔武田 1867、末松隆太郎 1990、池上 1991、マリズ 2005ほか〕。中でもクリスチャンの家庭における祭壇に言及している事例として、森岡清美は明治期のキリスト教受容の問題を扱い、その中で日本人のクリスチャンがキリスト教を受容する際に、これまで家に設置していた神棚や仏壇を偶像崇拜として廃棄する事例を取り扱っている。また、クリスチャンの日本人女性が仏教徒の男性の家に嫁いだ際に、仏壇を拝することができず離縁された事例についても報告している〔森岡 1970〕。これらの事例からわかるように、森岡の研究ではキリスト教受容の黎明期である明治期のキリスト教受容の問題を扱っており、近年の研究にあるようなキリスト教が逆にこの神棚や仏壇を利用する事例は扱われていない。しかし、日本人クリスチャンが未信徒家族（特に仏教徒の事例が多い）との間に家庭の祭壇をめぐる葛藤を抱いていたことがわかる。この研究を引き継ぐ形で、待井扶美子は日本人クリスチャンが抱える未信徒家族との間の葛藤を、特に死者への供養に焦点を当てて研究している。論中で待井は、日本人クリスチャンが葛藤の末、仏教的にも見られる行為に新たにキリスト教的な意味合いを付与することで、クリスチャンとしてのアイデンティティを保っている事例などを挙げ、この現象を「キリスト教の日本的習俗化現象」と定義している。この論中では、特にプロテスタントの日本人クリスチャンが家庭に設置している「故人を記念するコーナー」「(プロテスタントの) 家庭祭壇」を事例として言及している〔待井 2005〕。ここでは、どのような物品が置かれているのかが詳述されているが、その家庭の祭壇がいかに形成され、それに対し司祭と信徒双方がどのように考えているのかについては触られていない。本稿はこの点における欠を補えるものと考えられる。さらに、

教区の宗務局があり、その地方の駅に近いなど交通の便がよく、信徒が毎週聖体礼儀を受けられる、という点で仙台を都市部と判断した。一方地方としては、司祭が在中していないことや毎週聖体礼儀が行われていないこと、地方からくつことを考えた時交通の便があまりよくないことから、仙台と対比させる形で地方と本稿においては判断している。これらの要素は『デジタル大辞泉』で「都市」と検索した際に、「多数の人口が比較的狭い区域に集中し、その地方の政治・経済・文化の中心となっている地域」とあるため、人口と交通の面から判断を下している〔『デジタル大辞泉 第二版』小学館〕

冒頭で述べた物質性の観点から家庭祭壇に置かれるモノを分析することで、キリスト教的意味合いとはまた別にある「モノ」それ自体が持つ機能について言及することで、より広い視野から家庭祭壇やそこにあるモノのあり方を考察できると考えている。

以上の先行研究を踏まえ、日本正教会の歴史的背景を踏まえながら、仙台正教会でのフィールドワークおよび信徒へのインタビュー、中新田正教会でのフィールドワークおよび信徒へのインタビューを分析・考察することで、今現在家庭の信仰の場において何が起きているのかを明らかにしたい。また、考察するにあたり、各教会の頒布物である様々なパンフレットを分析・調査することで、司祭および信徒の考え方やニーズを分析し、家庭祭壇における現状をそれを取りまく教義と実践のせめぎあいについても考察を試みたい。

最後に、研究における倫理的配慮として、本研究の手法がフィールドワークを中心としており、また本人の信仰あるいは家庭の祭壇を見るという非常に個人的な問題を扱うため、調査対象へのインタビューの際は事前にその内容を学術論文において使用することの許可を得ている。また、名前などの個人情報かわからないようアルファベットを用いて代用し、調査の際に得た名前や住所、連絡先などの個人情報を厳重に取り扱うなど、インフォーマントへの倫理的配慮を行っている。

2. 家庭祭壇をめぐる背景

そもそも、歴史的に家庭祭壇はどのような変遷を経てきたのだろうか。次の2-1では宣教当初の日本人正教徒宅の家庭祭壇について述べている司祭の意見を確認したい。残念ながら、当時の信徒の家庭祭壇について考察できる資料はこれ以外現状見つけられないため、ここでは司祭が家庭祭壇を日本に持ち込む際にどのように考え、また日本人の死者を習慣とどのように付き合ってきたのかを明らかにする。また次の2-2では、そもそも正教会においてイコンを祭壇に置くことが偶像崇拜にあたらぬ根拠として、8-9世紀にあった聖像破壊論争について確認することで、その後の3章以降実際に正教会の家庭祭壇

を見ていく際の憂いを取り払っておく。

2-1. 来日した宣教師の対応

さて、正教会における家庭での祈りは、宣教以降にはどのように考えられてきたのだろうか。『ニコライの日記』には、宣教当時、すなわち明治期における宣教師ニコライの家庭祭壇に対する考え方が、以下のように述べられている。

1893年4月21日（5月3日）、水曜。敦賀

日本の家々には「仏壇」が実に立派にしつらえてある。敬虔な日本人は仏壇を信仰にふさわしい状態を保つように熱心に努めている。ろうそくを灯し、花を供え、香をいている。

この「仏壇」を、そこに納められている偶像は追い払って、イコン〔正教の聖画像〕を納める厨子として使わない法があろうか。われわれの信徒の家では、イコンは安住の場にはない状態にあるのだから。

そうになったら名前を「^{シンダン}神壇」あるいはその他の適切な名称に変えるべきだろう。仏壇をイコンのために使うということについて、司祭たちと相談し、それから公会でも全員で検討する必要がある。ひょっとすると何か異議が出てくるかもしれない。わたし自身は、よく考えてみたが、障害になることはないと思う。「カミ〔神〕」¹³という日本語が真のボーグ〔神〕をさすために使われることによって聖なるものとなっていくように、仏壇も、真に神聖なもののために使われることによって、神聖なものになっていくだろう。もちろん、仏壇をイコンの安置所として使う前に、成聖〔聖別〕をする必要はあるだろうが。

[ニコライ（中村訳）2011: 83-84、下線は筆者による]

この日記から、宣教師ニコライはロシアと同じく、日本でもイコンへの崇敬

13 ロシア語の表記は Бор。

を行うべきであると考えており、またイコンは信徒家庭にも置く必要があると考えていたことが述べられている。そして、そのためには現状仏壇として使用されているその「外側」の部分をそのまま正教会の祭壇として用いることを提案しているのである。これは、ニコライ自身が宣教時に「ロシアの」正教会を日本にそのまま持ち込むのではなく、正教会が日本に土着化して「日本の」正教会となることを非常に重要視し、ニコライが日本の文化や習慣に非常に柔軟に対応していたことが大きな要因であると考えられる。

また次に、日本のみならずロシアや他の東方正教会でも重要視されているイコンと偶像崇拜の関係について確認したい。聖像破壊論争での議論は、モノについて考察する上でも非常に重要だが、正教会において家庭祭壇を設けることそのものの意義にもつながる議論であるので、家庭祭壇について語る上で重要な議論の一つと言えるだろう。

2-2. 聖像破壊論争

ここでは、正教徒にとって、教会はもちろん家庭の信仰の場でも非常に重要なモノであるイコン¹⁴に関して、8-9世紀に東ローマ帝国で行われたイコンを巡る論争を紹介することで、正教会のイコンへの考え方を明確にするとともに、正教会においてイコンが偶像崇拜ではないという見方の根拠を示す。これにより、イコンを中心に据える家庭祭壇の事例におけるモノのあり方を考察したい。

聖像破壊論争（イコノクラスム iconoclasm）とは、文字通りに言うなら「イコンの破壊」を意味する。イコンを拜むことが旧約聖書の律法中の「あなたは自分のために、刻んだ像を作ってはならない」[出エジプト記 20: 14, 15]という議論を基にし、これにあてはまるかどうか、つまりイコンを拜むことが偶

14 イコン icon: 「イコンとは、姿・像（イメージ）を意味するギリシア語「エイコーン」に由来する言葉で、通常は木の板に描かれたイエス・キリストや聖母マリア、さらに天使や聖人などの人物画像を意味する。けれどもより広義な定義として神聖な画像であれば、布・金属・羊皮紙・フレスコ・モザイクなど、いかなる媒体上のものであってもイコンと見なされる。」[中谷 2017: 96]。

像崇拜にあたるかどうかについて話し合われたのが、この論争である。この論争に至るまでの過程を簡単に述べると、11世紀に圧倒的な存在感を放っていたローマ帝国は東西に分裂し、またそれと共に起こった様々な異民族の移動や侵入による動乱の中で、ローマの東部が中心となって継承し成立したビザンツ帝国は正教会を受け継いだ。正教会はビザンツ帝国の荘厳な宮廷儀礼の諸要素を含む政治文化を取り入れ、より正教会独自の儀礼および文化を形成していった。その中で、古代末期の地中海世界に出現した聖人やその遺物が民衆の崇敬を集め、またそれと並行して聖なる存在を描いたイコンへの崇敬もまた急速に広まった。帝国時代初期は、聖画像への傾倒が偶像崇拜にあたるかどうかの疑問の声が多少ありはしたものの、人々のイコンへの崇敬はますます高まる一方だった。これは、イコンが「貧民の聖書」、つまり読み書きのできない信者たちが聖書をより深く理解する教化のための手段でもあったからである。しかし、8世紀になって皇帝レオン三世がエーゲ海で発生したカザンの大噴火をイコン崇拜への神罰と見なして批判したのを皮切りに、以降イコンへの崇拜にまつわる暴動や反乱が頻発するようになる。それに伴い8世紀から9世紀前半にかけてビザンツ皇帝たちが人々の崇敬するイコンを偶像とみなしてその破壊を命じたため、ビザンツ社会で大論争が巻き起こり、聖像破壊論争へと至った。イコンに反対する派閥はイコンをモーセの第二戒を破ると考えたが、一方イコンを擁護する派閥は父なる神は描けないが、神が子となるイエスとして受肉し人の姿でこの世に現れたことによって、人の姿をしたイエスは描きうるし、イコンは神の受肉を証明すると考えた。つまり、イコンを「窓」として天井にある原型としての神を崇めていると考えたのである。これに対し、カルケドン信条にあるキリストの神性と人性の統合に反するという反駁もあったが、これに対しイコン擁護派は、イコンに対する態度は神に対する「崇拜 adoration」ではなく「崇敬 veneration」であると主張した。結果、正教会はイコンを公式に認め、イコンを祈りの際に用いると定めたことで、イコンにおける教義のあり方を確立し、それと同時に正教会においてイコンへの崇敬を揺るぎないものとした[ホプロコ2016: 64、中谷2017: 92-120]。

聖像破壊論争を経験することで、正教会におけるイコンはイイスス・ハリストスへ開かれた「窓」としての役割を果たすため偶像崇拝にはあたらないとされ、その後正教会でイコンはなくてはならないものとして受け入れられていった。そして、この考え方から正教会において重要なイコンを家庭で安置する場所、すなわち家庭祭壇もまた正教徒にとって非常に重要な場所となっていくと考えられる。

以上の議論を踏まえた上で、2-3では、来日した宣教師が当然参考していたであろう、ロシアでの家庭祭壇を見てみたい。また3章では実際の日本の正教徒宅の家庭祭壇へのフィールドワークにおけるデータを通して、家庭祭壇にどのようなモノが置かれているのか、そしてそれは司祭と信徒のどのように理解されているのかを考えていきたい。

2-3. ロシアでの家庭祭壇

本稿では、日本の家庭祭壇を考えるために、日本への伝教もとであり、現在正教徒がマジョリティな国の一つであるロシアにおける正教徒の家庭祭壇についても簡単に触れてみたい。なお、本稿では、ロシアと日本の家庭祭壇の比較を行うことが目的ではなく、日本の家庭祭壇の特徴をあぶりだすための試金石として現在（2018年時点）のロシア人家庭に置かれる家庭祭壇の事例を提示するものである。

まず、ロシアの家庭祭壇は一般的にはクラスニイ・ウゴール Красный угол¹⁵と呼ばれ、「美しい



写真1 20世紀頃の伝統的の家屋の家庭祭壇の模型 [2018.10.25. ロシア民族学博物館にて筆者撮影]

15 ボジニツァ Божница (Полка или киот с иконами. (イコンを置く棚もしくははケース。[Толковый Словарь Русского Языка 2018:94]) と言うことも。ブックレット『暮らしの中のロシア・イコン』では、ロシアの家庭祭壇を「神棚」と日本語訳されているが、本稿ではその後の日本の家庭祭壇との整合性を考え、これ以降は「家庭祭壇」に統合して表記する

隅」を意味する。ブックレット『暮らしの中のロシア・イコン』に、いくつか説明がなされているので、簡単に確認したい。

ロシアの家庭祭壇は、20世紀以前のロシアにおける農民の典型的な住居である丸木小屋では、生活の中心である暖炉のある居間にしつらえられていた。伝統的家屋では、玄関から扉を開けて居間にはいった時左手の奥隅の、光が最も当たる東南の方角にあるのが一般的であった。また、家庭祭壇には何枚ものイコンが置かれ、祭壇上だけでなく壁にもよく掛けられていた。また、祭壇には戸棚のように扉を付けたリ、刺繍を施した布で覆い「開閉」¹⁶できるものもあった（写真1）。またイコンの前には灯明が吊るされ、棚には季節の花や小枝、ろうそく、お香、紙細工、復活祭の卵子などで飾られ、イコンの裏側には祈祷書が置かれたり、ヘソクリが隠されたりすることもあったようである。またブックレットの筆者は、このことについて、日本の仏壇との類似を指摘している。

置かれるイコンは、教会のイコノスタス¹⁷の中央にある「とりなし」の段の構成を模して、中央に「救世主キリスト」、向かって左に聖母子像、右に「聖ニコライ」の三枚が飾られることが好まれた。ただし、聖母子像だけや、聖ニコライだけ、御利益イコン¹⁸、地域で崇敬されている聖人のイコンなど、各家庭によって思い思いのイコンが飾られていた。

また家庭ではふつう朝夕の食事の時に家庭祭壇に祈りを捧げ、また居間に通された来客は何よりもまず先に家庭祭壇に向かって十字を切って祈りを唱える習慣があった。これ以外に、例えば厳冬期のクリスマス週間のお祈り、病氣平癒、旅の安全祈願なども、この家庭祭壇で祈られたとされる [中沢・宮崎 2012: 9-11]。

次に、実際に現在のロシア正教徒宅の家庭祭壇を見てみたい。2018年度に調

こととすることとする [中沢・宮崎 2012: 9]。

16 この家庭祭壇のカーテンが「開かれている」ときは、喫煙や罵り言葉を吐くなどの「汚れた」行為は慎んだと言われる [中沢・宮崎 2012: 10-11]。

17 イコノスタス：至聖所と聖所を区切る壁のことで、「イコンのついたて」という意味。「聖障」とも [日本ハリストス正教会教団 2013: 211]。

18 御利益イコン：病氣平癒、夫婦円満、家内安全、暗算。厄災除けなど、家族の健康と仮定の平安を祈願するために特に制作されたイコン [中沢・宮崎 2012: 24-25]。

査した際、首都モスクワにおいて、地元の教会で堂役¹⁹を務める信仰熱心なI氏の家庭における家庭祭壇の事例を見てみたい。以下はI氏へのインタビュー調査の内容をまとめたものである²⁰。I氏によると、現在家庭内に家庭祭壇を作るロシア人正教徒は非常に少なく、特に都会になるほど置かれなくなり、逆に地方に行くほど家庭祭壇が設置される傾向があるそうである。I氏宅には主にイコンを飾っている場所が2箇所あり、それは書斎(写真2)と寝室(写真3)である²¹。他に、居間に飾る人も多いとのことである。書斎には、方角に関係なくたくさんのイコンが飾られており、I氏が個人的に好きなイコンや、最近認定された聖人のイコンなど、非常に多種多様なイコンが飾られている。なお、向かってその右下には亡くなった母の写真が飾られおり、I氏曰く、「家族の写真とイコンを同列に飾ることはない」のだそうである。確かに、I氏宅の書斎では、壁にイコン、そしてその下の小さな棚の上に家族・親族の写真が置かれており、それらの写真はイコンよりずっと下に来るように置かれている。



写真2 I氏宅の書斎
[2018.10.14. 筆者撮影]



写真3 I氏宅の家庭祭壇①
[2018.10.14. 筆者撮影]

次に家庭祭壇だが、I氏宅の場合、これ

19 教会において、聖体礼儀などの儀礼を行う際、補助をする非聖職者。ただし、よくその教会に通っているなど、その教会でよく知られた熱心な正教徒が務める場合が多い。

20 2018.10.14. I氏へのインタビュー調査。

21 I氏は「イコンを飾るのは寝室が最も多い」と述べていたが、ロシアのTVのCMなどを見ると、居間に設置されていることの方が多く見受けられた。また、I氏は非常に信仰熱心なためか、寝室と書斎以外に各部屋に1枚イコンを置いていた。

は寝室のベッドの上の隅に飾られており、東南の方角にある。また、写真では見づらいが、刺繍の入った布の上に、聖母子像のイコン、「救世主キリスト」のイコン、そしてその周りに4枚の聖人のイコンが飾られていた（写真4）。その手前には、香炉（置き型）、ろうそくが置かれている。



写真4 I氏宅の家庭祭壇②

[2018.10.14. 筆者撮影]

家庭で祈る際には、イコンに向かって祈るそうだが、食事の際などには食卓について目を閉じて祈っていた（イコンの方を注視するなどはなかった）。

以上を簡単にまとめると、現在家庭祭壇を設置する家庭はロシアでも減少傾向にあり、その傾向は特に都会では（モスクワはよりいっそう）顕著であるそうである。また、イコンは書斎か寝室、居間に飾られており、家庭祭壇自体は、主にイコン、ろうそく、香炉以外はあまり置かれられない傾向にある。これらのことを参考にしながら、3章以降では日本の家庭祭壇の特徴をより明確化するとともに、その形態についても着目していきたい。

3. 現代日本の正教徒たちの家庭祭壇

3-1. 家庭祭壇の定義

3章では、日本正教会における家庭祭壇、およびそこに置かれるモノが正教会でどのように教義的に捉えられているのかを考えるために、まずそれらの持つ歴史的背景を踏まえながら考察したい。そのためには、最初に家庭祭壇がいかなるものであるのかという点から確認する必要がある。京都ハリストス正教会から頒布されているパンフレットには、家庭祭壇について次のように言及されている。

家庭での祈りを献げる家庭祭壇は、その家の人の集まりやすい、いちばん

よい場所にできれば部屋の東側に作りましょう。聖像・十字架・燭台・香炉・聖書・祈祷書などを安置します。お花を飾ってもいいでしょう。家族・友人（永眠者含）の写真は、祭壇正面つまり聖像や十字架と同じ位置には飾りません。写真は別の壁や棚などに飾ります。

[日本ハリストス正教会教団 パンフレット「信徒の心得」、下線は筆者による]

このパンフレットには、上記の記述の横に模範となるであろう家庭祭壇の様子を示す写真が示されていた（写真5）。そこには多くのイコンとともに、ろうそくや聖書、そして司祭の写真などが棚（台に乗せている場合もある）に置かれた家庭祭壇の写真が載せられている。物質的側面から見ると、日本の正教会側が期待する家庭祭壇のあり方としては、イコンが置かれていること、ろうそくや聖書などの信仰を助けるモノを



写真5 パンフレット「信徒の心得」より家庭祭壇の例

置くことを推奨しているが、一方家族や友人の写真は生者死者に関わらず祭壇の正面にはおいてはならない（ただし、聖人の写真は別である）という認識があることがわかる。

以上をまとめると、日本正教会の家庭祭壇について、正教会は設置することを推奨しているものの、一方で日本の供養文化との混淆を危惧するような文面が注記されていることは特徴と言えるだろう。また日本の家庭祭壇は、特に置かれるモノに関してロシアの家庭祭壇と似ており、おそらく参考にしているものと考えられるが、ロシアにおける家庭祭壇のように方角にこだわったり、部屋の隅であることに対して明言したりする文言はないことが特徴の一つである。

またここで、家庭祭壇を置く意味、家庭祭壇が持つ機能についてどのように語られていたかも、確認する必要がある。ブックレット『暮らしの中のロシア・

イコン』には、ロシアにおけるイコンについて、下記のように示されている。

葬礼がすんだ後も、イコンは死者とのかかわりをもっていました。19世紀の庶民生活についてのある報告によると「死者の魂は、六週間のあいだ生前にあるいた場所をうろついており、もとの家で食べたり飲んだりさえする。だから、六週間は死者の親族は神棚に水やパンのかけらを供える」としています。イコンを安置した神棚は、日本の仏壇と同じように、先祖たちとつながりを保つ場とも考えられていました。そのため、「ドミートリイの追善の土曜日」（10月26日の前の土曜日）と呼ばれる先祖供養の祭日には、ブリヌイという薄焼きや焼いたばかりのパンを、神棚のイコンに供える習慣もあったといえます。

[中沢・宮崎 2012: 45、下線は筆者による]

上記にもある通り、日本における家庭祭壇は、ロシアの家庭祭壇と同様に、個々の家庭において神を拝み、祈りを捧げる場であると同時に、先祖を供養するという側面も多分に持ち合わせている。この家庭で祈るということに関して、特にロシアでは、厳冬のため外出ができず教会に行くことができない場合の代わりとして家庭で祈っていた、という文脈から家庭内での祈りの場が積極的に設けられていたとされる [中沢・宮崎 2012]。このような言及は日本の家庭祭壇では聞かれないが、先祖の供養の側面を考えると、日本文化における死者供養とこの家庭祭壇は非常に相性がいいと言えるだろう。

さて、以上のことから、家庭祭壇について教会側の推奨する形態、およびその機能について簡単に見てきた。しかし、正教徒に限らず日本のキリスト教徒全体にも言えることだが、個々の家庭の祭壇となると、やはりその家ごとの個性が出るものである。中でも日本の家庭祭壇を考える上で着目すべきなのは、キリスト教以外の信仰に際して用いるモノ（特に岸本でいう宗教文化財）、中でもとりわけ日本の場合は神道や仏教の祈りの際に用いられる祭壇やモノとの関わりである。そのため次項では、まず実際の日本人正教徒がつくる家庭祭壇

を具体的に検討した上で、他宗教との関わりについて触れつつ、祭壇に置かれる具体的なモノの分類と都市部と地方の家庭祭壇の比較を行いたい。

3-2. 仙台ハリストス正教会 信徒宅の家庭祭壇

仙台ハリストス正教会は、宮城県仙台市青葉区の街の中心にある、信徒数430名、司祭数3名（内1名は東日本の大主教）が所属する教会である。歩いて5分くらいの場所に宮城の中心である仙台駅があり、交通の便も立地条件も非常によい。また、仙台正教会は東日本主教教区の宗務局であるため、司祭3名が在申している。正教徒にとって最も重要な聖体礼儀²²は毎週行われ、毎回約25~40名ほどが集まり共に祈っている。十二大祭や復活祭を盛大に祝うのはもちろんのこと、毎月の月例パニヒダや聖名祭も実施されている。また教会に所属する信徒は箱舟会（男性信徒の会）や婦人会、聖歌隊などを組織し、教会の運営に携わっている。司祭らは東北のいくつかの教会も掛けもちで担当しており、3-3で紹介する中新田ハリストス正教会もまた、仙台正教会の司祭が担当している。

次に、仙台正教会史を簡単に振り返りたい。仙台の地に正教会が伝教されたのは1861年である。1863年には当時函館にいた宣教師ニコライの命により、仙台出身であった小野莊五郎、高屋仲、笹川定吉の三名が伝教者として函館から帰った後仙台に伝教を開始した。その後市内4か所に講義所を設けるに至ったが、しかし翌年には「邪教を伝えて国禁を犯すもの」として小野ら3名に加え、ともに伝教を行うために来仙していた澤邊琢磨をはじめとした14名が投獄され、同時に信徒120名がそれぞれ禁足の刑や親戚預りの刑を受けた。その後、自由な布教が可能になると、1873年には澤邊、笹川、高屋らを始めた信徒の尽力により、東一番町、南町通りに仮会堂が作られ、最初の公祈祷が行われた。1892年になると、聖ニコライ大主教によって成聖式が行われ、ビザンチン様式の白亜の生神女福音聖堂が竣工した。その後1945年の仙台大空襲の際に焼夷弾

22 正教会における日曜礼拝のこと。

の直撃により敷地内の建築物が焼失したが、神父らの尽力によりその年の12月には木造の祈祷書兼教役者住宅が建設され、1959年には生神女福音聖堂が再建された。その後、聖堂の老朽化に伴い、2000年には初代聖堂の面影を残しつつも新しい近代的な生神女福音聖堂



写真6 仙台教会信徒O宅の家庭祭壇
(2017.12.26.Oより提供)

が成聖されている。また同年東北から北海道にわたる東日本主教教区を統括する大主教を迎え、教区を中心に位置づけられる。なお、大主教派2019年度より東京の副司教に就任し、全国の正教徒たちから厚い尊敬を集めている。

次に仙台正教会の信徒に家庭祭壇について、考察していきたい。なお、ここに出てくる写真は全て筆者が撮影したのではなく、信徒の方のご厚意により、ご自宅の家庭祭壇を撮ったものを提供していただいている。

まずは、仙台正教会に所属する信徒宅にある家庭祭壇を確認していきたい。写真6は、信徒Oの家庭祭壇である。O宅の家庭祭壇は本棚の一部のスペースに設けられており、祭壇には多くのイコン（目視で数えられる限りでは、小さいものを含めてその数31点）が飾られており、右側手前にはろうそく²³と乳香が置かれている。また、家庭祭壇の置かれる本棚はO個人の書斎に設けられており、これは他の仏教徒である家族への配慮であるそうである²⁴。



写真7 仙台教会信徒Y宅の家庭祭壇
(信徒Yから2017.12.26.信徒Oを通じて提供)

次に、同じく仙台正教会の信徒

23 正教会ではランバートとも呼ばれる。たいていは赤い小さいコップのようなものにろうそくが入っている。

24 2017.12.26. 仙台正教会信徒Oへのインタビュー調査による回答。以下、()内は筆者による補足。

Y宅の家庭祭壇を確認したい。写真7を見ると、Y宅の家庭祭壇は台の上に設けられており、4つのアイコン、そして信徒と司祭の写真、教会のイラストが飾られている。それとともに生花が飾られ、教会型の置物やろうそく、香炉が置かれている。また、壁に掛けられて



写真8 仙台教会信徒T宅の家庭祭壇
(信徒Yから2017.12.26.信徒Oを通じて提供)

いるアイコンの上には、聖枝祭の際に教会で成聖され配られた棕櫚の木の代わりにネコヤナギ²⁵が置かれている²⁶。このように壁にかけたアイコンに成聖されたネコヤナギを置くのは、他の多くの信徒宅でもよく見受けられる。

最後に同じく仙台正教会の信徒T宅の家庭祭壇も同様に確認する。写真8を見ると、T宅の家庭祭壇は信徒Yと同様台の上に多くのアイコン(写真から数えた限り17点)が台の上に置かれている。アイコン以外に、台の上には八端十字架、ろうそく、花、ぬいぐるみ、乳香と香炉、ネコヤナギが飾られている。また、壁には十字架の首飾りがかけられている。

3-3. 中新田ハリストス正教会 信徒宅の家庭祭壇

中新田ハリストス正教会は、宮城県加美町郡の田園地帯にある教会である。一帯は昔、中新田町と呼ばれていたが、現在は加美町の一部に属する。聖体礼儀は地理的要因上、月に一度、仙台教会の司祭が担当している。月に一度の聖体礼儀には通常10人前後が集まるそうである²⁷。

25 ロシアでは、4月に行われる聖枝祭の時期には棕櫚の木が手に入らないため、代用としてネコヤナギを用いるのだが、仙台正教会もそれに倣ってネコヤナギを聖枝祭には用いる。日本で正教会がネコヤナギを使用する理由は手に入らないわけではなく、例えばカトリック教会などは棕櫚の木を用いて聖枝祭を行っている。

26 2017.12.26. 信徒Y, Tにインタビューを行うことはできなかったが、代わりに信徒Oが掛け合い、写真の提供と使用許可だけいただいたため、得られたデータは写真からの情報のみとなる。

27 2017.10.28. 信徒へのインタビュー調査による回答。

次に中新田正教会史についても確認しておく必要がある。なお、中新田正教会史については、情報源がとして中新田正教会のホームページのみしか確認できなかったため、以下はその内容をまとめたものである²⁸。中新田ハリストス正教会・前駆授洗イオアン聖堂は、宮城の田園地帯に位置し、1884（明治17）年に最初の会堂が建立されている。有名な正教のイコン画家である山下りんのイコンがあり、現聖堂は1967（昭和42）年に建立された。中新田の地に正教の伝道がなされたのは、1882（明治15年）



写真9 中新田正教会の木製十字架
(2017.10.28. 筆者撮影)

年、ワシリイ針生伝道者によってであり、当時は伝道者の宿泊する旅館において伝道会という形で行われていた。以降少数ながらも熱心な信徒を得、1884（明治17）年に最初の会堂を建立し、信仰の中心となる会堂が成聖された。1967（昭和42）年には新聖堂の建立に際しウラジーミル主教によって成聖式が行われた。2003（平成15）年には、老朽化した聖堂の改修が行われ、その際にはセラフィム主教によって成聖式が行われた。以上の歴史的事柄からもわかるように、中新田地区における正教の伝道は早く、1861年に宣教師が来てから約20年後に行われている。また、現在いる信徒の多くはその信仰を先祖から受け継いでいる者が多く、現在先祖から数えて3代目～5代目の正教徒が多い。

ここで、中新田正教会の家庭祭壇の大きな特徴として「木製十字架」の存在をあげることができる（写真9）。木製十字架は中新田地区における正教徒間で「位牌の代わりに用いられる」木製の十字架である。教会で献金と共に渡されており、中新田正教会での価格は3,000円である²⁹。この木製十字架は中新田

28 2019.10.30. 最終閲覧 <http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-nakaniida.html>

29 ただし、今はこれだけを求めるものはおらず、埋葬式代に含められているそうである [2017.10.28. 中新田正教会信徒へのインタビュー調査による回答]。

正教会信徒宅の家庭祭壇に通常設置されている。

十字架の表面には上から「神の僕（婢）とありクリスチャンであることが示され、そのすぐ下に永眠者³⁰の聖名が記入される。また左右の「死出」「生入」はそれぞれ、死んだこと、そして復活する存在であることを示している。なお、木製十字架の日本全国への普及率はわずか14%³¹あり、また東京大主教教区では実施されていないことから基本的には比較的的地方において実施されていることが予想できる。また中新田正教会信徒へのインタビュー調査の結果から、中新田ではおよそ1970年代に木製十字架の使用が開始され、1990年代に定着したものと考えられる³²。

さて、それでは中新田正教会信徒宅の家庭祭壇を分析していきたい。写真10、および写真11は、中新田ハリストス正教会信徒G宅の家庭祭壇である。信徒Gはその先祖の2代目から正教徒に改宗し、以来その信仰を受け継いでいる。なお、写真10は全体を、写真11は台上を写したものである。まず全体から確認すると、G宅の家庭祭壇は床の間を利用して作られており、祭壇の左右の壁には、向かって左には十二大祭と復活祭を表す



写真10 中新田正教会の信徒G宅の家庭祭壇 (2017.10.28. 筆者撮影)



写真11 中新田正教会の信徒G宅の家庭祭壇(台上) (2017.10.28. 筆者撮影)

- 30 正教会では信徒が亡くなるとハリストスが復活するまで「永眠した」と考えるため、したがって亡くなった信徒を「永眠者」と呼ぶ [ダヴィド水口 2013 (2004): 110]。
- 31 2017.10～11月に筆者が行った日本全国の正教会の司祭に向けた質問紙調査の結果。返答率は約76%である。また、回答の結果、九州の2か所の教会と東北の7か所の教会において、信徒宅で用いられているという回答を得た。
- 32 2017.11.11. (1990年代に中新田正教会を担当していた) 司祭Dへのインタビュー調査より。

アイコンが飾られており、一方右には先祖代々の遺影が、奥から手前に年代順に飾られている。また、向かって正面の壁に掛けられているアイコンには、聖枝祭で配られたと思われるネコヤナギが飾られている。また祭壇の下方には、学位記が飾られている。祭壇上を見ると、まず目に入るのが4つの木製十字架があり、その側には小さいアイコン、そして木製十字架が対応する永眠者の写真が添えられている。その他中央には真鍮製の十字架、そして燭台、ろうそくに灯すためのライター、香炉と乳香、聖書、祈祷書、聖歌の楽譜、聖水、聖油、成聖されたパンがある。また手前にお茶があり、また人にもらったお土産や手作りの紅卵³³なども置かれている。

信徒 G およびその妻 H に話を伺うと、「木製十字架はいつからかわからないが、中新田ではどこにでもあるもの」であり、「このような十字架はやっぱりあるほうがいい。その方が祈りやすい」という回答を得た。また、アイコンや十字架、燭台、乳香などはハリストス正教会教団から買ったが、乳香を置く香炉や家庭祭壇のための台は信徒 G 自らで作成したものであり、他の多くの信徒も各自で様々な工夫をこらしているとのことであった。お茶について尋ねると、「毎朝あたらしいものを神様にあげる。お茶を持ってくると神様に向き合える。（お茶を習慣的に）毎朝あげることで、毎日お祈りをしなきゃいけないし、中新田ではだいたいの人がやっている」という回答を得た³⁴。

また実際の家庭祭壇は確認できていないが、中新田正教会の信徒 W と話をした際には、押入れを祭壇として利用しているそうで、他の知り合い（特に仏教徒）の存在を想定し、線香やお鈴を置いたりしているという話も聞くことができた³⁵。

また、この事例に関して司祭にもインタビュー調査を行った。そこでは、「（線香を乳香の代用としていることに対し、）天へと煙がのぼることに意味があ

33 イースターエッグを指す。しかし、正教会では赤く塗られるのが一般的であることから紅卵と呼ぶ方がより一般的と考えられる。

34 2017.10.28. 中新田正教会信徒 G、および H へのインタビュー調査による回答。() 内は筆者の補足。

35 2017.10.29. 中新田正教会信徒 W へのインタビュー調査による回答。

る」³⁶という話や、「木製十字架はあってもなくてもよいものだが、教義に反しない形でなるべく信徒の希望に沿うことが重要」³⁷であり、また「正教会は頭で難しく教義を考えるよりも、どちらかといえば信仰を感じる点に重きを置いており、そのために用いられるのであれば(木製十字架は)教義に反しない」³⁸という話を聞くことができた。

4. 日本の正教徒の家庭祭壇をめぐるモノの物質性^{マテリアリティ}

本章では、いよいよ3章で検討した具体的な事例を分類・比較し、検討する。まず、4-1でこれまで見てきた家庭祭壇から、現代日本の家庭祭壇の設置場所の面からいくつか検討して現代の家庭祭壇の傾向を見出し、次いで家庭祭壇に置かれるモノを大きく四つに分類する。最後4-2で都市部と地方での家庭祭壇をそれぞれ比較検討することで、(土地的な)空間・場所によって異なる見え方のする家庭祭壇について検討したい。

4-1. 家庭祭壇に置かれるモノ

最初に、これまで見てきた現代日本の家庭祭壇を、祭壇が置かれる場所からいくつかその形態を分類し、現代の日本人正教徒の家庭祭壇における特徴を見出したい。

日本の正教徒たちは、家庭祭壇をさまざまな場所に設置している。中でもよく聞かれるのは、本棚、押入れに設ける場合である。本棚は、例えば仙台正教会の信徒O宅の場合がそれであり、リビングや書斎などに置かれる場合が多い。また押入れの場合は、押入れ



写真12 神戸教会に通うR宅の家庭祭壇外観
(R本人から2019.10.14.提供)

36 2017. 司祭Aへのインタビュー調査による回答。(日付不明)

37 2017.05.12. 司祭Cへのインタビュー調査による回答。

38 2017.10.29. 司祭Cへのインタビュー調査による回答。

の片側の扉をはずし、その上段を祭壇として利用するのが一般的である。筆者が確認した限りでは、中新田地方や東北の地方（詳細な場所は不明）、比較的地方の信徒間でなされることが多いようである。またこれ以外の場合に最も多く聞かれたのは、部屋の中のどこかに台を置き家庭祭壇を作る事例であり、祭壇が設けられる場所はそれぞれの部屋の空いたスペースに作られ、方角などはあまり気にされない。また比較的珍しい事例だと、例えば写真12、13の事例である。神戸ハリストス教会に通っているRは、「だんぼっち³⁹」と呼ばれる商業用の段ボール製の組み立て式で室内に置くことができる小部屋を祭壇として利用している。また、食器棚を利用する事例も聞かれる⁴⁰。この場合、棚の中央から片側を正教徒のための祭壇とし、もう一方の片側は非正教徒の家族（仏教徒）が仏式の祭壇として利用しているそうである。また、大きいお宅だと、中新田正教会の信徒G、H宅のように、床の間に台を置いて正教徒のための祭壇にする事例や、大坂ハリストス正教会にて少量の販売を行っていた正教会が作成した家庭祭壇の事例も聞かれる（写真14）。ただし、大坂正教会にて販売されている家庭祭壇は筆



写真13 神戸教会に通うR宅の家庭祭壇
(R本人から2019.10.14提供)



写真14 大坂正教会にて販売されている家庭祭壇
[2018.09.11. 筆者撮影]

39 公式HPによると、個人用段ボール防音室のことであり、価格は十万円前後ほどである（2019年度のamazon.com、公式HPでの価格を参照）。家庭内において個人的な空間を確保する目的で作成されたようである [https://www.danbocchi.com/ 2019.11.13. 最終閲覧]。

40 2017.12.24. 信徒Sへのインタビュー調査による回答。

筒位のサイズがあるためか、一般家庭には中々置きづらいとの声が信徒から聞かれ、また実際に販売されたのは1台のみであるそうである。

次に、家庭祭壇に置かれるモノをここで便宜上大きく四つに分類することで、次項での考察を深めたい。四つの分類とはすなわち、①正教会において推奨されているモノ、②①以外の正教会関連のモノ、③キリスト教以外の宗教的文脈を持つモノ、④それ以外のモノである。これについては、下記の表を参照されたい。なお、右記は3章で確認したモノを分類したものである。

表1 家庭祭壇に置かれるモノの分類表

正教徒の家庭祭壇に置かれるモノ	
①正教会推奨のモノ	イコン、十字架、ろうそく（燭台）、香炉（乳香）、祈祷書
②①以外の正教会のモノ	聖歌の楽譜、聖水、聖パン、紅卵、ネコヤナギ、木製十字架、花
③キリスト教以外の宗教的文脈を持つモノ	お鈴、（同じ空間にある）神棚、仏壇
④それ以外のモノ	お土産、学位記

上記の表を簡単に説明すると、①は家庭祭壇について書かれていたパンフレットで述べられていた、イコン（聖像）、十字架、ろうそく（燭台を含む）、香炉（乳香を含む）、祈祷書が主に挙げられる。①と②の違いは、①はないと祭壇が成り立たないと考えられるが、②は必ずしも置く必要があるとは考えられていないが祭壇に置かれることのある正教会に関連するその他のものである。したがって、例えば②は、聖歌の楽譜や聖水、聖パン、紅卵、ネコヤナギ、花などを指し、こちらは家庭によって個人によって様々なバリエーションがあると考えられる。次に③であるが、これは現在把握している事例は少な



写真15 位牌が用いられる家庭祭壇
【撮影日不明、仙台正教会より提供】

いが、祭壇に直接置かれるわけではないが同じの空間にあることが(一般的に)ためられるということを考慮し、神棚や仏壇、また正教会の文脈で信徒が利用していても、キリスト教的文脈以外の背景を物質として持つ、お鈴りん(中新田で聞かれた事例)や、写真15の事例のような、正教徒の名が書かれた位牌などが挙げられる。最後に④は、①②③以外のものである。すなわち、具体的な事例で言うなら、お土産や学位記などを指す。

またここで、日本の文化背景を踏まえ、③のモノについてももう少し詳しく検討したい。特に日本の場合は、その文化背景から仏教や神道などの他宗教の信徒と関ることが多く、その影響が反映されることもあるため検討する必要があるだろう。

まず、『正教の手引き』のあとがきには、当時の執事会代表であり編集責任者である高橋文夫が下記のように、日本の正教徒の当時の現状について語っている [仙台ハリストス正教会 1967: 135-138]。

さて、日本人の宗教感覚は極めてあいまいな点がありますが、宗派を超越して混淆統一化してしまうことは、中々巧みであります。

たとえば、家の中では神棚(主として神道の)や仏壇を一緒にかざっても平気でありますし、町へ出では、お地藏さんや、お稲荷さん、また庚申さんや、氏神様、観音様等も拝み、旅行先では、神社、仏閣、キリスト教寺院にまでも手を合わせたりしています。

(…この後、これらは「まことに便利、重宝な面白い民族感情」としつつも、「高遠、高邁な宇宙、萬物の創造理念と哲理に基づく全智、全能の神(ハリストス教)こそは…真の宗教といわねばなりません」として、正教会の正当性を説いている。)

[仙台ハリストス正教会 (文責：高橋文夫) 1967: 135-138、下線、()内は筆者による]

上記の手引きにこのような言及があるということは、実際に神棚や仏壇を、

少なくとも手引きの発行された1960年代には、正教会の家庭祭壇が設置される空間に置く者がいた、という証明にもなるだろう。この、キリスト教的文脈から見て「異教的な」モノと、現在の日本の正教徒はどのように付き合っているのだろうか。

また同じくこの『正教会の手引き』の「正教会の奉事（捧神礼、典礼、儀式）、習慣および心得等について」にも、Q & A 方式で家庭祭壇について触れられている [仙台ハリストス正教会 1967: 87-100]。少し長いが、下記に引用して記したい。

12 正教会信者の家では、神や先祖を祭（祀）るための祭壇等を設ける必要がありますか？あるとすればその形態、形式等は？

○ 先祖の霊そのものを祭（祀）ることはありません。先祖の霊、つまり人間の霊は神ではなく、神につくられたものなので、霊を敬拝することはあっても、そのものを崇拝するということは、ないのです。

霊を敬拝するということは、正教会の言葉でいえば、「死者の記憶のためにパニヒダを献ずる」ということであります。従って信者の家では、先祖の霊を祭（祀）るための祭壇等は必要ありません。

しかし、司祭の訪問や祈祷のために、小さな棚や台を設けて（これらを祭壇といってもよい）天上には聖画像をかけたり、棚や台には聖書や十字架、祈祷本、灯明およびパニヒダ用品等をのせておくことは、好都合です。

[仙台ハリストス正教会 1967: 96-97、下線は筆者による]

上記の記述からは、日本の正教会が家庭祭壇を規定する際に、先祖の霊を祀ってはならないことを明記する一方、司祭の訪問または家庭での信徒の祈祷用の祭壇を設けることは、ずっと推奨されていたことがわかる。

以上のことをまとめると、まず現代日本の正教徒宅に置かれる家庭祭壇の形態は非常に多種多様であるが、大まかにその形態を設置される場所から分類すると、本棚、押入れ、台を設ける、それ以外という傾向が見いだせる。また、

昨今はよりアレンジを加える信仰者もあり、「だんぼっち」なる個室空間を作成して祭壇を設ける者もあった。続いて、祭壇上に置かれるモノを①正教会推奨のモノ、②①以外の正教会に関連するモノ、③キリスト教以外の宗教的文脈を持つモノ、④それ以外のモノの四つに分類を試みた。この分類は4-2において比較検討する際に用いたい。また③から派生して、日本の文化背景を踏まえ、家庭に置かれる正教会以外の宗教宗派の祭壇との兼ね合いについて、正教会で出版されている手引きから示した。手引きからは、家庭祭壇を設ける際に日本における先祖供養との混淆を避けることが意識されていたこと、またそれにもかかわらず、実際には先祖のモノが置かれていたことが推測できる上、正教会以外のキリスト教から見て異教的な祭壇（具体的には神道の神棚、仏教の仏壇など）も同じ空間に設置されており、教会としての対応が求められていたことを読み取ることができる。上記を踏まえた上で、4-2において、都市部と地方、今回は仙台と中新田を事例として、家庭祭壇に置かれるモノから、家庭祭壇のあり方の違いを考察したい。

4-2. 都市部—地方における家庭祭壇の比較

3章では主に、仙台正教会信徒宅の家庭祭壇、および中新田正教会信徒宅の家庭祭壇について、その祭壇におかれるモノについてこれまで詳述してきた。また4-1ではその分類法を示した。そして本項では、仮に仙台を都市部、中新田を地方として設定した場合、家庭における信仰の場の中心となる家庭祭壇におかれるモノの共通点と相違点を考察することで、正教会の家庭祭壇の特徴について考察するとともに、家庭祭壇におけるモノが正教徒たる自分と他者（同じ正教徒はもちろん他の宗教宗派の人）との間をどのように関係づけ、またモノと人がどのような相互性の中で関係づけられているのかについて、分析・考察を行いたい。

まず、家庭祭壇に置かれるモノを、上記4-1にて分類した表1に当てはめ分類した時、以下の表2のような状況について把握することができた。

表2 家庭祭壇に置かれるモノの分類表

日付	所属教会	都市部/地方	氏名	①正教会推奨のモノ	②①以外の正教会のモノ	③キリスト教以外の宗教的文脈を持つモノ	④それ以外	備考
	正教会 バンフレット			イコン・香炉・燭台・十字架・聖書・祈神書				
2017.12.26	仙台正教会	都市部	信徒O	イコン、ろうそく、香炉				
2017.12.26	仙台正教会	都市部	信徒S	イコン、香炉、他?		仏壇(「仏教の本」、お鈴、数珠)		インタビューのみ、養子嗣を祭壇として利用
2017.12.26	?	地方	信徒E	?				信徒Sの母、信徒Sへのインタビューより
2017.12.26	仙台正教会	都市部	信徒Y	イコン、ろうそく、香炉	神父との写真、生花、教会型の置物、教会のイラスト、ネコヤナギ			写真のみ
2017.12.26	仙台正教会	都市部	信徒T	イコン、ろうそく、香炉、乳香、十字架	ネコヤナギ、十字架の首飾り		ぬいぐるみ(ミッキー)	写真のみ
2017.10.28	中新田正教会	地方	信徒G.H	イコン、ろうそく、燭台、香炉、乳香、十字架、聖書、祈神書	木製十字架、ネコヤナギ、聖水、聖油、聖パン、聖歌の家譜、生花、紅餅、(乳香用の)ライター		遺影、学位記、おみやげ、お茶	
2017.10.29	中新田正教会	地方	信徒W	イコン、ろうそく、他?		(乳香代わりに) 線香、お鈴		
?	?	?	信徒X		大量の正教徒の名が打たれた位牌、花(バラ)	(乳香代わりに) 線香、ご飯	お茶	写真のみ(仙台正教会提供)
2018.10.14	サントベテラルブルグの教会	都市部	信徒I	イコン、ろうそく、香炉				サントベテラルブルク在住、補祭
2019.10.14	神戸正教会	都市部	R啓蒙者	イコン、ろうそく、香炉、聖書、祈神書、十字架	聖歌の家譜、教会型の置物			だんばっち使用
2018.09.11	大阪正教会	都市部	販売用展示	イコン、香炉				

この表2より、都市部である仙台の信徒宅より、地方である中新田の方がより多くのモノを置く傾向にあるが、その内容は①正教会推奨のモノを踏まえた上で、それにプラスする形で②①以外の正教会のモノ、③キリスト教以外の文脈のモノ、④それ以外すべての項目に当てはまるモノが置かれる傾向にあった。また、都市部より地方において③キリスト教以外の文脈のモノが置かれる傾向

にあることがわかった。

また、左の図1は、仙台と中新田をそれぞれ都市部と地方に分類した際にどのような特徴がみられるかを図示したものである。これを見ると、都市部では家庭祭壇上のモノの量は少なく、また家庭祭壇を利用する対象として、自分を含む家族が想定されていることがわかる。一方、地方では、家庭祭壇上のモノの量は比較的多く、また家庭祭壇を利用する対象と

都市部	地方
<ul style="list-style-type: none"> ・対象: 仙台正教会の信徒宅など ・祭台上: 物量少ない * イコン、十字架、聖書、花、燭台(ろうそく)、乳香、ネコヤナギ... ・誰が利用するのか? →自分、家族 	<ul style="list-style-type: none"> ・対象: 中新田正教会の信徒宅など ・祭台上: 物量多い * イコン、十字架、聖書、花、燭台(ろうそく)、乳香、ネコヤナギ、木製十字架、お茶、写真(遺影含む)、お土産、聖水、聖パン、聖油、イースターエッグ、学位記、線香、(お鈴)... ・誰が利用するのか? →自分、家族、近所の人、友達や知り合い...

図1 都市部-地方の家庭祭壇の比較図

利用する対象として、自分を含む家族が想定されていることがわかる。一方、地方では、家庭祭壇上のモノの量は比較的多く、また家庭祭壇を利用する対象と

して、自分や家族のほか、近所の人、友達、知り合いなど、非常に多くの人に見られるものであると考えていることがわかる。

また共通点としては、イコンの数についてあげることができるだろう。すなわち、都市部においても地方においてもイコンは最低でも2つ以上飾られており、ロシアでの場合のように自分の聖名にちなんだ（もしくは永眠者の聖名にちなんだ）イコンもまた、たくさん置かれている。

以上のことを踏まえて、日本の供養文化を受けて誕生し、しかも比較的新しい実践であり、地方でのみその利用が聞かれる木製十字架というモノをここでは具体的事例とし、さらにモノの持つ物質性を考察したい。まず、木製十字架とは①位牌の代わりに用いられ、信徒の要望により日本で独自に始められたモノ

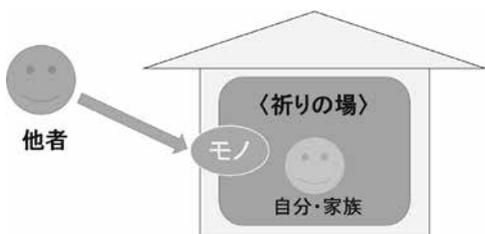


図1 都市部－地方の家庭祭壇の比較図

であり、②イコンが偶像崇拝にあたらぬ理論を拡張させ、家庭祭壇、そして木製十字架はあくまでも神への信仰の助けとなるモノである、と理解されている。また、家庭における信仰の場でモノは、中新田正教会にお

ける木製十字架のように、そのモノが祈りの助けとなる、という宗教文化財としての役割の他に、他者の眼が意識されて置かれるという側面があることがわかる。そして、この他者の眼が意識されればされるほど、その祭壇上により多くのモノを求める傾向があることが、地方と都市部の比較からわかる。日本の正教会の事例に限定したとしても、この他者の眼を意識する、つまり自分（あるいは家族）と（家以外の）他者をつなげるという機能は、モノの持つ物質性の一側面として挙げることができうと考えられる。また補足として、先行研究にもあるように、木製十字架のような新たに作られたその地域独自の実践、中でもモノとしての実践は、その使用に際して新たなキリスト教的解釈や意味付けが与えられるものだが、そのための教義との調整もまた、自分と他者、正教会信徒と司祭（と他のその地域における正教徒）の相互理解の中で行われ見

出される。

5. おわりに

最後に、これまでの議論の総括を行う。日本の正教徒らの家庭祭壇には多くのアイコンが置かれ、それと同時に他の多くのモノが置かれている。正教徒らはそこで個々の信仰をより深めるのと同時に、先祖への供養も行う。この際に、日本の供養文化で見られる位牌やお鈴などのモノも、キリスト教的な意味付けが付与され取り入れられている。また、木製十字架のように、新たな実践（モノ）が生まれることもある。このモノが、宗教的場面で用いられた時、モノはどのような機能を有しているのかを検討することが、本稿の目的である。

その手始めに、日本人正教徒宅の家庭祭壇に置かれるものを4つの分類項目、すなわち①正教会推奨のモノ、②①以外の正教会に関するモノ、③キリスト教以外の文脈で用いられるモノ、④それ以外、に分類した。その上で、②の正教会に関するもののうち、明らかに日本の仏教文化および供養文化に影響を受け、日本で独自に作られた木製十字架を、都市部と地方における家庭内の祈りの場におけるモノの具体的な例として考えた。木製十字架は比較的的地方において見られ、また地方の家庭祭壇は都市部に比べて、木製十字架などを含むより多くのモノが置かれる傾向にある。また地方では、自分や家族以外の他の宗教宗派の知り合いや友人などに、家庭祭壇を見られることが想定されていることがわかった。つまり都市部と地方では、家庭祭壇を比べた時、その祭壇を見る者として想定されている対象に差異が見られる。地方におけるこれら二つの特徴から考えられることとして、宗教的場面におけるモノは、自身の信仰を助けるという働きのほかに、友人、知人などを含めた他の宗教宗派・教派である他者への配慮として置かれることがある。つまり、家庭祭壇はごく個人的な信仰のためにあると同時に、他者に向けても存在しており、そして他者に開けているほど、そこにはより多くのモノが求められる傾向にあるということが指摘できる。このような現象が起こる理由としては、家が地域との結びつきが比較的強固な地方の方が、都市部に比べより家自体が他者に対して開けているため、家庭祭

壇に他者の眼が意識されていると考えられる。

以上をまとめると、家庭祭壇におかれるモノには、宗教文化財の役割を含んだ上で自分と他者とを相互に関係づける機能を持っていると考えられる。また家庭祭壇は、他者の眼があるときほどモノが求められ、家と地域が密着に関係しているほど、その家の家庭祭壇に置かれるモノは多くなる傾向にあると言える。したがって、その家に住む人とそれ以外の他者を結びつける機能こそが、家庭祭壇に置かれるモノが持つ物質性の一側面であると言える。

今後の課題としては、比較対象数としてのサンプル数の不足や、最後事例として用いた木製十字架を利用する地域が全体から見ると極まれである点から、上記の結論が日本正教会全体の傾向とは言いきれない。加えて、このほかに、東北地方の傾向でもあるが中新田地区は特に曹洞宗門徒の多く、実際正教徒と非常に隣り合っている地域であることから、中新田地区における地域性とも考えることもできる。これらについては、今後サンプル数を増やして比較検討を行い、またその地域における他の宗教宗派の人口や影響力も踏まえた上で考察を行う必要があるため、今後追って調査を行いたい。

【謝辞】

本稿を作成するにあたり、仙台ハリストス正教会の司祭および信徒の皆様、中新田ハリストス正教会の信徒の皆様、またモスクワのI氏と神戸ハリストス正教会に通われているR氏には、インタビュー調査および写真の提供など多くの点でご協力いただきましたことをここに感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

【参考引用文献】

秋山聡

2017「動く像—キリスト教中世における像の生動化をめぐる—」古谷嘉章、関雄二、佐々木重洋編『「物質性」の人類学—世界は物質の流れの中にある—』同成社、東京、103-129.

池上良正

1991『悪霊と聖霊の舞台 沖縄の民衆キリスト教に見る救済世界』どうぶつ社、東京.

岸本英夫

1983『宗教学』大明堂、東京.

教会史編纂委員会

2004『仙台ハリストス正教会史』仙台ハリストス正教会、仙台.

京都ハリストス正教会

「信徒の心得」京都ハリストス正教会、京都（パンフレット）.

司祭ダヴィド水口優明編

2013(2004)『正教会の手引』日本ハリストス正教会教団全国宣教企画委員会、改訂版.

末松隆太郎

1990「日本における祖先崇拜と福音」「福音主義神学」編集委員会『福音主義神学』21(2):23-42.

武田清子

1967『土着と背教』新教出版社、東京.

田中雅一

「儀礼」星野英紀・池上良正ほか2010『宗教学事典』丸善、東京、26-31頁.

徳丸亜木

1992「「信仰民具」と神祭りの場」『日本民俗学』191、日本民俗学会、69-98頁.

床呂郁哉・河合香吏編

2011『ものの人類学』京都大学学術出版会、京都

トマス・ホプロ

2009『奉神礼』（正教入門シリーズ2）日本ハリストス正教会西日本主教教区教務部、京都.

2016『聖書概論教会史』（正教入門シリーズ3）日本ハリストス正教会西

日本主教区、京都.

中沢敦夫・宮崎衣澄

2012『暮らしの中のロシア・イコン』（ユーラシア・ブックレット No. 176）東洋書店、ユーラシア研究所・ブックレット編集委員会企画・編集

中谷功治

2017「第三章 イコンの教会—ギリシア正教徒イコノクラスム—」指昭博、塚本栄美子編『キリスト教会の社会史 時代と地域による変奏』彩流社、東京、92-120頁.

中村健之介編訳

2011『ニコライの日記 ロシア人宣教師が生きた明治日本 中』岩波文庫、東京.

日本ハリストス正教会教団東日本主教教区

「洗礼を受けるために」日本ハリストス正教会教団東日本主教教区、宮城（パンフレット）.

ブリュノ・ラトゥール著、伊藤嘉高訳

2019 (2005)『社会的なものを組み直す アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局、東京

古谷嘉章

2017「プロローグ 物質性を人類学する」古谷嘉章、関雄二、佐々木重洋編『「物質性」の人類学—世界は物質の流れの中にある—』同成社、東京、3-32頁.

文化庁

2019『宗教年鑑』（平成30年度版）文化庁

(http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/shukyo_nenkan/index.html 2019.09.06. 最終閲覧)

待井扶美子

2005「我が国クリスチャンの〈弔い〉にみるキリスト教の民間受容」（博士論文（東北大学提出）、出版なし）.

森岡清美

1970『日本の近代社会とキリスト教』（日本人の行動と思想；8）評論社、東京．

森岡清美

1972「外来宗教の土着化をめぐる概念的整理」大塚史学会『史潮』109、大塚史学会 52-57頁．

森岡清美

1975『現代社会の民衆と宗教』（日本人の行動と思想；49）評論社、東京．

マーク・R・マリンス

2005（高崎恵訳）『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』トランスビュー、東京．

ヨルン・ボクホベン

2005『葬儀と仏壇—先祖祭祀の民俗学的研究—』岩田書院、東京．

Gell, Alfred

1998, Art and Agency, Oxford: Clarendon Press.

Ожегов, Сергей Иванович

2018: 94, 462 Толковый Словарь Русского Языка, Мир и Образование, Москва.

中新田ハリストス正教会 ホームページ

<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-nakaniida.html> 2019.10.30. 最終閲覧

Materiality of the objects placed on the home altar — Through comparison of home altars in the Orthodox Church in Japan —

Ai Sazaki

The purpose of this report is to consider the function that materiality of the religious “objects (it is a material thing that can be seen and touched)” has by analyzing the home altar and interviews of believers belonging to the Orthodox Christians in Sendai (urban area) and the Orthodox Christians in Nakaniida (countryside) as a main example. As previous researches, as for materiality-study (object-study), consideration has been accomplished from various fields including folklore and the archeology, but an argument is done very flourishingly in particular in the field of anthropology. Above all, Yoshiaki Furuya points out that there is a function to feel the world through objects realistically and suggests a study of "the materialness" [Furuya 2017]. In addition, Machii Fumiko drew some conflicts that a Japanese Christian held among non-believer families [2005, Machii].

I reported the example of some home altars which Japanese Orthodox Christian has, and I divided it into Sendai (urban area) and Nakaniida (countryside) for convenience and tried comparison analysis. I examined what was placed on the home altar that today's Japanese Orthodox Christian has in their house, used the way of my study by the interview investigation to some priests and believers, and the analysis of the brochures. As a result, in Nakaniida, Orthodox Christians has more open house and altar to the eyes of others, and in Nakaniida tended to put more objects on the home altar. Therefore, it is thought that the objects in a religious place has a function to bring about interaction between others with oneself through materiality.